



ふるさとの再生を目指して 広瀬川環境NPOに集まる人々

著者	石川 真紀子
雑誌名	東北人類学論壇
号	3
ページ	60-71
発行年	2004-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/56260

研 究 ノ ー ト

ふるさとの再生を目指して —広瀬川の環境NPOに集まる人々—

石川 真紀子

I. はじめに

日本における環境運動は、西欧のそれと比較して規模が大きくなりにくく、また一般化されにくい等と言われる。その背景として、日本の環境運動における被害現場の固有性の重視（ローカリズム）という特色が指摘されてきた（長谷川 2003:1）。この指摘を参考にしながら、本論文では「特定非営利活動法人 広瀬川の清流を守る会」（以下、「広瀬川の清流を守る会」）というNPO団体に焦点を当て、その活動と語りを通して、そこに参加する人々が広瀬川という固有の環境に与える意味を考察する。

仙台市内を貫流する広瀬川は、古来仙台市の用水の大きな部分を賄うなど広く市民に利用されてきた川であり、現在仙台市内で約 40 の市民活動団体の主要な活動対象となっている（仙台市企画局企画調整課 2002）。「広瀬川の清流を守る会」はその中でも会員数が多く、活動内容も多様な団体である。

研究方法としては、平成 14 年 7 月から翌年 1 月にかけてフィールドワークを行い、活動への参与観察を行った。また、主要メンバー 7 名に対してそれぞれ 5 時間から 10 時間程度のフォーマルなインタビューを行い、さらに、活動、各種イベントに際してインフォーマルなインタビューを併用した。

II. 広瀬川の清流を守る会

（1）構成

「広瀬川の清流を守る会」は、仙台市内のあるまちづくり団体の内部勉強会としてスタートしたが、より広瀬川に特化した活動をしようと平成 11 年に独立し、「広瀬川の清流を守る会」として設立された。その後 NPO 法人格を取得し、現在にいたる。

会員数は独立当時から凡そ 60 名で推移しており、平成 15 年度 5 月現在で会員数は 58 名（顧問・名誉会長含む）となっている。会員には、元となったまちづくり団体から続く基本メンバー、行政関係の知人の声かけで入ってきた「川関係の仕事の人」、他に新聞記事を見てきた人やメンバーの知人などがいる。

会員の構成は、性別では 58 名中 49 名（約 85%）と男性が多く、年齢別では 40 歳代後半～70 歳代の比較的高い年齢層の会員が多い。会員の出身地についてある会員は、「この川の会だって、ほとんどは広瀬川の近くに生まれ住んだ人でない人が多いのね」と語るが、これは後で見るように重要な意味を含んでいる。

（2）活動

「広瀬川の清流を守る会」の具体的な活動は大きく分けて以下の 4 つである。

①例会の開催

「広瀬川の清流を守る会」には毎月第 1・第 2 の 2 つの例会がある。前者は第 2 水曜、後者は第 4 水曜に市民センターで行う。

第 1 例会は、会員だけの集会である。参加者は筆者が参加していた期間中において毎回 5～10 名程で、決まったメンバーが集まることが多い。この例会で、後に記述する河川清掃や各種イベントの内容、役割分担等が協議されている。

第 2 例会は、「広瀬川公開講座」の名称で外部に公開される講演・質疑の集会である。参加者は筆者が参加していた期間中において毎回 5～15 名程で、第 1 例会より若干多い。これは外部（例えば新入会員や環境教育を行う学校教員、マスコミ関係者等）の参加者が増えるためである。講演のテーマは会員の要望を考え合わせて会長が決定しており、会の事業に関することや、地域づくり、川の歴史に関するテーマが選ばれる事が多い。

②広瀬川河川清掃

「広瀬川河川清掃」は、冬季 1・2 月を除き毎月一回行われる。平常の参加者は筆者が参加していた期間中において 10～30 名。しかし、清掃が他のイベントと合同で行われる場合には 100 名を超える大人数になることもある。清掃を行うのは、広瀬川中流域に位置する郡山堰から広瀬橋まで約 500 メートル。平成 15 年度から宮城県が実施している「アドプト制度」の認定を受けた区間だ。英語の adopt には「養子縁組する」の意味があるが、この制度により「広瀬川の清流を守る会」は上述の区間を養子とする里親として認定されている。これにより年 2 回以上の清掃活動が義務化する代わりに、活動中の事故に対する傷害保険の適用、看板の掲示許可を得て河川清掃は行われる。また、同年河川清掃に参加し登録手続きをした人に対して一定店舗で割引・サービスが受けられる疑似通貨であるエコマネー「アーユ」を発行し新たな参加者を呼び込む工夫も始めている。その紙幣には「昭和 30 年代の懐かしい広瀬川の風景」と会員の言う、川で遊ぶ子どもたちの様子が描かれ、「これが子どもの頃の原風景」、「こういう川にしたい」と口々に語る会員達の活動への想いが表れている。

毎回の清掃は、毎月第 2 土曜日の午前 10 時から正午にかけての間で約 2 時間。参加者は広瀬橋からスロープで河原に降りた所にある広場付近に集合する。目印は、上述の「アドプト制度」により常置が可能になっている会の幟だ。集合時間より少し前から、主要メンバーである理事、会長ら数名が

談笑しながら待っている。足元には、参加者のために用意された金ばさみと軍手、清掃用の燃えるごみ、資源ごみの分別ゴミ袋が2種類並ぶ。

みなきっちりと時間通りに集合するわけではなく、適当な時間、人数になるとメンバーはそれぞれ軍手に金ばさみ、ゴミ袋を持って散らばり始める。上述の区間中ながら、橋の歩道、河原、堤防の上の遊歩道で拾う者、堤防に引っかかっているごみをとる者、あるいは長靴を履いて川の中へ入る者等様々である。後者になる程、慣れた会員が行うことが多いようだ。清掃用具は会で用意しており、飛び入りでも参加できるように工夫されているが、常に参加するメンバーは用具も長靴も自前で用意している。区間の清掃は会が里親という責任を持ってやっているだけに、隅々まで拾おうとする気持ちが感じられる。

落ちているごみは、歩道にポイ捨ての吸い殻が非常に多く、数百本単位で落ちている。草むらに入ると、袋のまま捨てられたお弁当や空き缶の類も目に付く。河原では、盗難にあったらしいバックや自転車などが置きざりにされていることもある。ある会員は、「今は水質は綺麗だけど、見た目が汚れている。吸い殻等ポイ捨てが多い。モラルが大事なんだ」と語るが、他の会員の間でも、水質以上にポイ捨てごみが問題視されている。ごみ拾いは地道な作業だが、みんなでやる楽しみもあって、近所の子どもたちが参加した時などは賑やかな様相になる。

そろそろ時間という頃になると、最初の集合場所にぱらぱらと人が戻り始める。あちこちで拾っていた参加者達も様子を見て戻って来て、ごみを集め終わった所で「お疲れさまでした」の声と共に終わりとなる。集めたゴミ袋は1ヶ所に置いておけば行政が収集してくれる。芋煮のある10月頃は特にごみが多く、「川に来るのはいいけど、きちんと始末して欲しい」といった不満が口々に語られる。時にはごみ拾い後に一部の参加者からの差し入れを飲み食いすることもあり、活動の楽しみのひとつとなっている。

③政宗さんの川狩り

旧仙台藩主伊達政宗が広瀬川で魚とりを楽しんだ、という伝承に因んで名づけられた「政宗さんの川狩り」は、広瀬川の河川内に一定範囲の囲いをつくり、そこにアユを放して主に子どもたちにつかみ取りを体験させるイベントで、毎年8月に行われる。目的は、「普段川へくる機会の少ない市民が川を理解し、川の楽しみ方を五感で感じる」（平成14年度事業報告より抜粋）ことだという。フリーマガジンによる広報などもあり、参加者は160名（平成14年度）、200名（平成15年度）といった大人数となる。

前日までにつかみ取りをするアユの手配、囲い用の網の準備などをする。当日は午前中から、会場設営を担当する会員が資材を積んだトラックでやってきて、普段の活動には参加しない会員も集まり、総勢十数名で準備をする。午前中いっぱいかけて、アユを放す川の囲い、作業場になり受付も設けられるテント、アユを焼く炉端などをつくる大作業である。

午後、開会時間より少し早くから参加者が集まり始める。広報誌やポスターの効果か会員以外の参加は大体が徒歩でやってくる近所に住む子連れの家族だった。川に入るのも子どもが優先で、イベント自体が子どもを中心とした家族向けにつくられているという印象を受ける。

開会式が終わると、参加者は見張り役の会員が見守る中、小さい子どもから順番にアユが放されている川の囲いへと飛び込んでいく。子ども達の歓声が聞こえ始める。普段はしない体験だからか、皆一生懸命になってアユを探し、掴もうとしている。捕まえた魚を両手で掴み、子どもたちは次々にテントへ走る。テントでは、担当メンバーが魚を串刺しにして塩をつけ、焼ける形に整えてくれる。次は、それを焼くため炉端へ。近寄るとかなり熱いため、軍手を水で濡らしたメンバーがアユを受け取り、地面に突き刺して焼く。次々とやってくる子どもたちは、自分のとったアユが焼かれている場所を覚えていてそれを食べたがるから、気は抜けない。焼き上がりは、炉端担当のメンバーが見極め、待っている参加者に手渡す。

川からあがった参加者は河原のあちこちに腰掛け、焼けたアユを食べ始める。丸ごと串焼きにしたアユは、香りもよくおいしい。美味しそうに食べる人、今か今かと焼き上がりを待つ人、まだあきらめずに2回目の捕獲にチャレンジする人など様々で、いつもは人もまばらな河原がまるでお祭りのような賑わいである。それを見守る会員達も、「みんなすごく生き生きしてるでしょう」と嬉しそうに話す。皆が食べ終わった頃、簡単な閉会式があり、参加者はぽつぽつと帰っていく。残った会員達は、炉端の跡だけを残して綺麗に片づけをし、打ち上げへと向かうのである。

打ち上げでは、昔自分達もアユをとって遊んでいたのだと口々に思い出が語られた。会員はそれ「原風景」だと懐かしそうに言う。また、多くの意見として「なるべく汚さないようにしながら、みんなに川にふれて欲しい」というものがあった。このスタンスは会の活動の至る所に表れていて、例えば先の河川清掃の際にも河原で焼き芋をしたり、芋煮をしたりすることもある。人が行くことで川は多少汚れるかもしれないが、「川は眺めていたってだめ」、「川で遊んだことのあるのとないのとでは、その後の成長に差が出る」等という会員の話にも表れているように、川にふれることは会の中で重要視されているのである。

④ホタル事業

この事業では、会員自宅での飼育、観察小屋での観察会、ビオトープ¹づくり、学校・他団体でのホタルをテーマにした講演といった様々な活動が行われている。中でも最も重要なのはホタルの飼育であり、これは主に各会員の自宅で行われる。「広瀬川の清流を守る会」で飼育するゲンジホタルとヘイケホタルの場合、前年のホタルが生んだ卵から孵った幼虫は、大きな水槽に入れエサとなるカワニナ・タニシなどの貝類を与えて飼育する。エサは一週間に2個くらい貝をつぶしてやるそうだが、ホタルが住まなくなった土地にはこれらの貝類も生息せず、遠方までとりに行かねばならない。ある

¹生命 bio と場所 topos の合成語で、生物の生息空間のこと。多様な生き物が自然生態系を構築している場（特定非営利活動法人 日本ビオトープ協会ホームページ）。

会員は、「ホタルのことは広めたいけど、人の分までエサをとってきたりして世話することは難しい」と語る。

こうして飼育されたホタルは、成虫になるとビオトープや観察小屋で毎年夏期に1回ずつ観察会を開いて市民に披露される。ビオトープは宮城県の中央部にある蕃山にあり、ホタルの幼虫が棲息する水辺やエサとなる貝類、隠れ家となる草むら等の自然生態系を人工的に再現した空間である。平成14年に完成し、200名の参加で幼虫のエサとなる貝類の放流や生息環境の整備が行われ、翌年にはホタルの幼虫が数百匹放流された。一方観察小屋は仙台市長町の住宅街を通る郡山堀の脇につくられている。普段は静かな住宅街だが、観察会の際には河川清掃でも使われる幟で道案内がされ、都市の真中にホタルを求める人の列ができるのである。このビオトープと観察小屋での観察会は「広瀬川の清流を守る会」が行うイベントの中でも最大の動員力があり、観察小屋での観察会では平成12年の第1回観察会で600名、翌年の第2回観察会で1000名という参加者を記録した。第3回、第4回は共に約300名と参加者が減っているが、それでも大変な人数だ。

ホタル観察会の参加者も、先の「政宗さんの川狩り」同様親子連れが中心である。後述の環境教育支援を行っている学校の生徒及びその父兄、広報誌やポスターを見てやってくる近所の人の他、新聞にも掲載されるため市外からやってくる人もいる。ホタルの明滅を観察する他、大小のホタル幼虫や幼虫のエサとなるカワニナ貝を展示、ホタルの一生について資料を手渡ししながら説明も行われる。ただ見るだけではなく、ホタルを知ってもらうための工夫がされているのである。ほとんどの子どもたちにとっては初めて見るホタルだが、親世代にも初めてみる人が多くなっている。一方広瀬川のホタルを見たことのある年輩者には昭和30年代頃までは見られたというホタルを懐かしみ、会の活動に賛同する人もあったという。

また、こうした一定の場所での観察に加え、環境教育支援依頼を受けた学校（主に小学校）に対してホタルに関する講演と「飼育セット」の提供を行っている。会ではこの事業を「ホタルの里づくり支援事業」と呼んでおり、ホタル飼育や生息環境の確保、主に子どもへのホタルの普及に取り組んでいる。過去2年ほどは2ヶ月に一回のペースで講演依頼があったが、平成15年より仙台市太白区の助成事業となり、特定の小学校3校に対して年間カリキュラムを組んで支援を行っている。

助成事業で対象を子どもに設定したことについて、ある会員は「今の子ども達に芽をつくっておくことが大事。子どもから、先生や親にも伝わる。それをやる上でホタルが一番身近な指標」と語る。この事業では、子どもを中心としてホタルを広め、そこから生息環境である広瀬川の保全を訴えること、間接的に大人へも広めることが意図されているのである。会長宅にはこういった支援を受けた学校の生徒から送られたお礼の手紙が「宝物」として大切に保管されており、例会で嬉しそうに読み回す会員達の姿は印象的である。「政宗さんの川狩り」でもそうだが、このホタル事業では、子どもへのアプローチとホタルを通して川にふれることの重視が特徴として表れている。

Ⅲ. 変わりゆく川

行政による市民アンケートの結果によると、広瀬川には「身近にある」、「親しみやすい」といったイメージがある一方で、実際訪れる頻度では「ほとんど無い」や「年一回」とする人が全体の7割を占め、一般に関心、関わりとも高いとは言えない（仙台市企画局企画調整課 2002:67-70）。しかしその中でも性別の統計では女性よりも男性の方が関心が高く、年代別の統計では50歳代以上の年齢層の方が関心が高いという結果が出ている（同上:80）。このアンケート上で高い関心をした層が、先に確認した「広瀬川の清流を守る会」の構成員とぴったり一致する。

筆者はこの一致に重要な意味があるのではないかと考え、会員個人に対して広瀬川と会の活動について、関心を持つに至った背景に注目してインタビューを行った。その結果、口々に語られたのはそれぞれが子どもの頃の川遊びの経験であった。「広瀬川の清流を守る会」において広瀬川とその活動を語る際には、子どもの頃の川遊びの経験が非常に高い割合で取り出されることがわかったのである。会員達が現在の広瀬川について語る際、その向こうに彼らが子どもの頃の川の姿が見えてくるのである。これは、各活動において子ども達へのアプローチ、川にふれることの重視が特徴的であったことと関連があると考えられる。

ここまでの検討で、「広瀬川の清流を守る会」の会員達にとって広瀬川が持つ意味、そして彼らの環境意識の形成過程を考察するためには、会員個人の子どもの頃の体験についてより深く検討する必要があることが明らかになってきた。そこで以下ではインタビューの結果を子どもの頃の経験に関するものを中心に据えながら並べ直しを行い、現在の活動へ至る道筋に沿って分けて記述する。その際ポイントとなるのは、会員達から語られた川とのかかわりの質の変化である。

（1）子どもの頃の川

「広瀬川の清流を守る会」の人々へのインタビューでは、子ども～青年期にかけての川と密接なかかわりを保った生活の様子が、現在に比してよいものとして語られていた。その時期は会員達の年代からすると1930年代～1950年代、即ち昭和の前半期に当たる。社会状況としては、第2次世界大戦を含みその後の高度経済成長に差し掛かろうという時期である。

当時川は、「何をするとも無く子ども達が寄っている」空間であったという。会員の一人は「朝の6時から夜の6時まで広瀬川に浸かりっぱなし。3度の飯より川が好きだった」と語っているが、会員たちの話の中には実に多様で身近な川の姿が見られる。中でも最も頻繁に語られたのは川遊びに関することであった。明治～昭和初期にかけて、広瀬川では流域の農家が食糧確保を主な目的として漁を行っていたが（出典：仙台市史編纂委員会 1998:289-293）、当時子どもだった現在の会員達も様々な手法で遊びとしての魚とりを楽しんでいたそうである。魚をとる技は上手ければ自慢になり、その成果は食卓に上ることもあった。またダムができた現在は水量が減り難くなった飛び込みや泳

ぎも、会員達の子どもの頃には格好の遊びであった。会員達は当時の川の様子を含めて生き生きとその体験を語ってくれた。以下はその一部である。

昔の川ってのは、コンクリート護岸なんかしてなかったから、2 mも 3mも水草があって、小魚がいっぱいいてね。みんなそこでフナとかドジョウとってね。それが子どもの頃の遊び。楽しかったね。

昔はさ、泳いで川のこっちから向こうまで渡れると自慢だったわけさ。みんなが橋の上から飛び込んだりとかね。飛び込めると自慢になった。もう今水量が減っちゃったけどね。

こういった証言から分かるように当時の子ども達にとって川はポピュラーな遊び場であり、楽しい思い出に不可欠の要素なのである。他の会員の証言から、年齢が上がっても、当時人気のデートスポットだったというボートや釣りをして川に関わりつづける場面は多くあったようだ。

川はまた、風呂としても使われた。終戦後には、「夏になると、『泳ぐ』ではなく『水浴び』と言って川に出かけ、川底の砂利を体に擦り付けて垢を落として風呂代わりにした」という。風呂代わりに使ったり、泳いだり、とった魚を食べたりという事例から推察できるように、「川は汚いという観念はなかった」と語られたことが印象的だ。広瀬川に流れていた污水口の閉鎖が始まったのが 1966 年であるから当時の川には下水も流れていたのだが、「化学洗剤とかがなかったから、流れれば自然に帰っちゃう」とある会員が言うように、当時の排水、そして川に対する人々の感覚は「自然」だったのである。

ある会員は、川とのかかわりについて「川は子供時代の一番の遊び場で、コミュニケーションや自分を守る術など様々なことを学んだ」と語る。当時の川は、子どもだった会員達にとってたまり場であり学校であり、風呂であり、デートスポットであり…とそのかかわりは実に多様だったのである。

(2) 汚れていく川

一方現在に比して悪いものとして語られる川も過去に存在した。それが、(1) で取り上げた会員の子どもの時代より後の川である。会員達は(1) で取り上げたような頃の川については、「昔」「自分達が子どもの頃」といった言い方で大まかな時代区分を用いて語る事が多かったが、ここで取り上げる頃の川についてははっきりと年代を示して語っている。具体的には、「昭和 30 年代頃」、「高度経済成長の頃」という言い方がされる。例えば、以下のような会員の証言がある。

昔川には下水の排水口があって、汚れていたようだが洗剤が無かったから。洗剤の汚れが一番ひどかったのは昭和 30 年代。朝、川に行くと排水口の辺りに 1 m くらい泡があって、風が吹くと飛んでいった。

それから、「広瀬川は汚い」という感じになって、行かなくなっていった。

経済成長の頃は、みんなそんな（川の）ことは考えなかった。しわ寄せは川に集まったけど、経済成長が終わり落ち着いて振り返って初めてそのことに気が付いた。当時はまさに、川は下水道のようにになっていた。

（下線部は筆者による）

別の会員は「この 30～50 年で、川はずいぶん変わってしまった」と振り返っているが、彼らのように悪くなった時期というのは非常に具体的に区分された時代性をもって把握されていると言える。特に具体的なポイントとして語られているのは、上述の「経済成長」である。1950 年代半ば以降（昭和 30 年代～）日本各地で起こり、急激な工業化や都市の発展によって、環境問題とそれに対する運動はこの時期に顕在化した。日本において、高度成長と環境運動は切り離せない関係にある（飯島 2001:18-20）。

河川に関して言えばこの時期に起こった大きな変化は、都市に人口が集中した事と水道が整備された事だ。人々が成長の恩恵を受ける反面、増大する都市人口が排出する汚水が流れ込み、川は汚染されていた。建設ブームの影響で当時多くできたコンクリート会社等も、汚水を川に流していた（関根 1991:36）し、原料である砂利採掘も川底に採掘跡の穴である「蛸壺」をつくり、泳ぐ子ども達を危険にさらす事となった。水供給のためのダム、増産が叫ばれた稲作も、水量を減少させた。この為現在から見ても 1950 年代後半の水事情は最悪であった（仙台市史編纂委員会 1994:445-446）。

「広瀬川の清流を守る会」会員は、この当時の川を活動の上での反面教師として語っている。例えば、河川流量の少なさは経済成長期のダム政策の一面として語られ、下水が整備された今でも「下水のような川」という表現が汚い川の代名詞としてでてくるのである。

（3）かかわりを取り戻す

会員達の中には川とのかかわりが薄くなったことを問題視し、それを汚染と結びつけて考える傾向が強い。例えば、ある会員は以下のように語る。

川と人との関係、これは切っても切れないしね。それがね、ちょっと希薄になってね。みんな、そんなに川との関わり合いを強く感じなくなった。かくしてね、ごみを投げるし、川なんてどうでもいいっていう感じになった。

この考え方は、会員の証言のあちこちに表れ、例えば「橋から眺めているだけじゃ、川は下水にしか見えない」というように語られる。現在の川を改善する為には川にふれることが重要であり、だからこそ活動において川にふれることが重視されているのである。

また、「広瀬川の清流を守る会」の人々は川の汚染を語る際に、しばしば「昔は…」、「ダムがない時代は…」等といった同一の河川における通時的比較を行う。例えば、以下のような意見がある。

高度成長で汚染されてから下水道が普及して、まだきれいになった。今は水質検査をしても水質は正常できれいだが、悪いのは大雨が降ると年に何回かは汚水が流れ込むこと。それから、ダムが無い時代は水が一気に流れて大水になって川底のゴミを掃除していたのが、今は水量が少なくてそれが無い。
(下線部は筆者による)

こういった比較は、会員達がきれいだったと感じている高度成長前と、反面教師となっている高度成長後の両方を知っているからこそなされるものであり、その時代性を色濃く反映していると言える。三木(1984:26)によれば、現在の環境保護や屋外レジャーのような自然を求める行動は、都市から自然が失われた事の代償であり、都市の歴史と軸を一にしているという。元来都市に存在したありふれた自然である広瀬川に対して保全運動が起こっているのは、都市の身近な自然が危険にさらされた高度成長によって生じた動きのひとつと考えられるのである。

IV. ふるさとと自然

「広瀬川の清流を守る会」のような環境運動は、経済成長による急激な都市自然の変化の影響を強く受けている。経済成長は、その時期を生きた世代の人々の中にその成長の陰で喪っていったものへの喪失観を生み出し、変化する以前の状態を取り戻そうとする意識をつくりあげたと言える。坪井(1986:297)は、現代は農業や自然などの見直しが「故郷」の象徴のように強く押し出されているとして、それを「喪われたものへの回帰によって閉塞状況を越えようとする試み」と捉えた。本論文で言えば、「広瀬川の清流を守る会」の活動が生成した背景と考えられる会員の子供の頃の経験が即ち「喪われたもの」であり、これに回帰しようとする活動は坪井の言う「故郷」の象徴として自然を見直す試みと捉えられる。従って、「広瀬川の清流を守る会」において川は単なる自然環境ではなく、経済成長以前に対する郷愁を誘う「ふるさと」としての意味を獲得してきたと考えられるのである。この「ふるさと」を倉石は以下のように分類した。

①空間的なある距離を持って認識される場所

②時間的なある距離を持って認識される場所

①は、離郷者が思う「故郷」であり、②はいわゆる「心の故郷」を表しているという(倉石1996:297)。しかし、イメージされる「ふるさと」というのは思い出とかかわっており、現実存在している空間であっても時間的距離を隔てた過去と結びつく傾向が非常に強い。つまり上の①にも②にも、「時間的なある距離」を内在しているのである。「広瀬川の清流を守る会」会員の間で子どもの頃の広瀬川が現在の広瀬川との比較基準となっている事を考えると、彼らにとって子供の頃の広瀬

川は、現存の広瀬川とは異なる、「時間的なある距離」をもって認識される場所である「ふるさと」のひとつを形成していると言える。

さらに田中（1996:10-11）は、心の支えとなる「ふるさと」は現在実体として存在している生まれ育った土地では必ずしもなく、美化された自らの過去の投影を可能にしてくれる土地であると主張する。この論から、会員の中に直接広瀬川で遊んだ経験のない人が多く含まれることを説明する事ができる。会長自身広瀬川流域に住み始めたのは 30 代頃からであり、「広瀬川に対して原風景はない」と言う。しかし、「ふるさと」に要求されるものとは個人の美化された過去の投影を可能にする景観、人間関係であり、それを現在の広瀬川に投影することで活動が生成しているのである。

これまで検討してきたことをまとめると、以下のことが言える。「広瀬川の清流を守る会」の活動の背景には子どもの頃の川との深いかかわりがあり、それが経済成長によって喪われたことで、「ふるさと」として捉えられる広瀬川が形成された。だからこそ、会員間では昔そうであったように川に触れることが重要視され、人間形成への影響等も語られていると考えられる。現在会員達が川を守ろうと活動している事実こそ、川を守る為に人々が川にふれることを重視する根拠となるのである。また、「ふるさと」としての川は実体としてある子供の頃に経験した川である必要はなく、そこから投影され、また新しく生成され続けるものである。

加えて、本論文で主張しておきたいのは、現在再生されようとしている「ふるさと」が単なる自然としてのそれではなく、各々のかかわりを含んだ総体であるという点である。以下の会員の話からは、その関わりを通して生き生きと川の姿を捉えていることがわかる。

やっぱり、川は眺めてたってだめなんだよね。
一緒に、一緒に生きる。

川をね、みんな愛してるからこういう事をやっているんだよ。子どもの時のあれだね、原風景だねやっぱり。川で遊んだっていうね。みんながいたからね、あそこの川に。まあ、ボート遊びとか、カヌーとかね、そういうのは、やりたいよね。

これまでの会員の話の中でも、自然そのものではなくそれと関わってきたあり方が語られていた。会員たちが子どもの頃に「一緒に生きる」と認識していたような川とのかかわり方は、自然としての川と一体となって会員たちに記憶され、一個の「ふるさと」を形成している。よって、「広瀬川の清流を守る会」の会員達が再生しようとしているのは単なる「自然」としての川ではないのである。

V. おわりに

ここで本論文の最初の指摘に立ち返ると、日本の環境運動に対して指摘されてきた被害現場の固有性の重視やローカリズムといった特色は、「広瀬川の清流を守る会」においてもある意味では強く存在するものである。しかし、会員達が活動対象である「広瀬川」や活動の動機等について語るとき、そこに現れてきた具体的なものは、それぞれ違った姿の川とそのかわりであった。彼らの中の被害現場の固有性とは、「ふるさと」として具体的に語られる子どもの頃の川に生じたそれであり、現在目の前にある川にそれが投影されているのである。直接広瀬川に「原風景」をもたない人々も、自身がかかわっていた川を語りながら、今目の前にある川に対してそれを投影し、熱心に活動している。投影される子どもの頃の川はまさに当人に固有のものでありながら、「広瀬川の清流を守る会」という活動として生成されえたのは、経済成長の影響という共通項が存在したからであろう。「広瀬川の清流を守る会」の活動は、「ふるさと」の文脈で言えばまさにふるさとづくり（再生）であり、彼らは、高度成長以前の広瀬川を「ふるさと」とする共通の思いによって結びついた集団であると捉える事ができる。彼らの活動における「ローカル」な場とは実際には現存する広瀬川であるが、その背景にはそれぞれに固有の「ローカル」な場である「ふるさと」としての川があるのである。

引用文献

長谷川公一

2003 「政策形成と環境運動のダイナミズム」『環境と公害』33巻1号、東京：岩波書店。

飯島伸子

2001 「環境社会学の成立と発展」『講座環境社会学』第1巻、東京：有斐閣。

倉石忠彦

1996 「都市生活者の故郷観」『日本民俗学』第206号。

三木和郎

1984 『都市と川』東京：社団法人農山漁村文化協会。

関根一郎

1991 「広瀬川の魅力」『広瀬川物語』仙台：仙台市中央市民センター。

仙台市企画局企画調整課

2002 『悠久の流れ・広瀬川創生プラン策定基礎調査』仙台。

仙台市史編纂委員会

1994 『仙台市史特別編1 自然』仙台。

1998 『仙台市史特別編6 民俗』仙台。

田中宣一

1996 「故郷および故郷観の変容」『日本民俗学』第206号。

坪井洋文

1986 「故郷の精神史」『日本民俗文化体系 第12巻 現代と民俗』、東京：小学館。

みちのくYOSAKOIまつりの民族誌

平野 佳緒里

1. はじめに

みちのくYOSAKOIまつりは、「鳴子を持って踊ること・曲に東北または地元の民謡を取り入れること」を二大原則とする踊りの祭典である。矢島（2000）によると、この「鳴子を持って踊ること・曲に民謡を取り入れること」を原則として行われる祭りを「よさこい」¹形式の祭りと呼び、高知新聞（2003）によると、2002年には全国222箇所で行われた。

「よさこい」は毎年8月10日・11日に開催される高知市の祭り「よさこい祭り」を発祥とする。この祭りは、踊りのスタイルや衣装、音楽は自由で、参加者が見せる技を磨いた「見せる祭り」（内田 2000）である。1954年に商店街活性化、更に市民のための祭りを創るため、高知と商工会議所の主導で始まった。祭りを創る際、隣県徳島の阿波踊りに負けないものを創りたいと、祭りで使用する音楽の作詞・作曲、そして振付の作成を依頼された武政英策が、「鳴子」を使うことを思いついた。「鳴子」とは、田畑にきた鳥を追いかう道具で、米の二期作が行われる高知の祭りにうってつけのものだと考えられた。この「鳴子」は現在まで「よさこい」形式の祭りのシンボルとして使われ続けている。そして、祭りに使われる音楽は「よさこい鳴子踊り」と呼ばれ、高知民謡「よさこい節」と、「土佐わらべ歌」を組み合わせて作られた曲である（よさこい祭り振興会 1994）。祭りが始まった当初は、この曲に合わせて、日本舞踊の師匠が考えた「正調よさこい鳴子踊り」のみが踊られていたが、フランス・ニース・カーニバルへの参加や時代の変化に伴い、次第にサンバ調、ロック調などアレンジした曲で、自由な創作舞踊が踊られるようになった。2003年に50回目を迎えた現在、50年間「正調」を踊り続けてきた団体も存在するが、現在では独自の音楽を創作し、独自の踊りを披露する団体も多い。その際、「鳴子を持つこと」「曲に『よさこい鳴子踊り』を取り入れること」は原則とされるが、それ以外の音楽や衣装等に関しては、自由とされる。

¹ 本論では、鳴子を持って踊ること、曲に民謡を取り入れるという「よさこい祭り」の原則を取り入れた祭りを「よさこい」形式の祭りと呼ぶ。また、「よさこい」形式の祭りの中には、「YOSAKOI」とローマ字で表記するもの、「夜さ恋」のように当て字を用いるものもあるが、本論中では、「よさこい」全般に関して「よさこい」と平仮名で表記する。ただし、祭りの名前に関しては、その表記に従う。